

2019年9月25日(水)

老球の細道502号

スポーツパーソンシップ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

W杯バスケットボール、W杯バレー、W杯ラグビーが目白押しでテレビ放映されている。色々なスポーツの世界最高のプレイを観ることは色々な意味で勉強になる。特に激しい戦いをした後に両チームの選手達が、今世界で問題になっている民族、人種、宗教を超越して、お互いにハグしながら健闘をたたえる姿はスポーツの素晴らしいところである。ゲーム中は乱闘寸前になりながらも、ゲームが終われば勝敗に関係なくライバルに感謝しあう。トップアスリートの矜持である。

福島県、会津地区の高校バスケットボール公式戦においては、かつて試合が終わったら両チームの選手全員が握手してコートを出る慣例があったのだが、最近あまり見られなくなった、どうしたのだろうか。相手チームや審判をリスペクトする精神は「スポーツマンシップ」として多くの人に認知されているところであるが、最近日本野球の問題を扱った『野球消滅』(中島大輔著 新潮新書)を読んだところ、それよりバージョンアップされた「スポーツパーソンシップ」なるキーワードが紹介されていた。ポイントは3つ。

①感情の抑制

どんなに状況においても自分自身をコントロールして、冷静に物事を見るということです。勝ちや成功におごらず、また、負けてふてくされたり、落胆することなく次に備えなければいけない。負けた時、自分の感情を抑えて相手の勝利や成功をたたえ、それに負けないように自分が努力するということです。

②相手に対する思いやり、リスペクト

相手の素晴らしかったプレイを評価し敬意を持つということです。自分たちがやられて気分が悪いと感じることは相手にもしてはいけません。相手あってのスポーツなので、相手にも気分よくプレイしてもらい、それでも負けないぞという気持ちでお互い勝つために全力でプレイします。プレイヤー、審判、観衆など、ゲームに関わるみんなでいい試合を作っていくということが大切です。

③フェアプレイ

プレイヤー(味方と相手)、ルール、審判を尊重し全力を尽くすことです。スポーツにルールができたのは、暴力をなくすことや、相手と条件を同じにするためや、ルールを作ることによりより難易度を上げ、より楽しめるようにするためです。ルールを守ること、より良い試合ができるようになります。そのルールを運用し試合を円滑に進めるサポートをするのが審判です。

現役時代の私はコートに入ると不思議なくらい好戦的になり、平常心を失ってプレイしたり、相手チームの選手を嫌な思いにさせたり、審判に暴言を吐いたりしていた。スポーツパーソンシップのひとつもなかった。今ふりかえると赤面の至りである。

ミスジャッジを含めて成り立つのがスポーツ。本来勝っても負けても評価されるチームを創るのがスポーツ。その根本にあるのがスポーツパーソンシップ。この精神は子どもたちの教育にも大きな影響を与える。スポーツに教育的使命がなくなれば、スポーツの存在価値はなくなる。